



毎日、毎日、その女の子はある男の子の後をランドセルを揺らしながらくっついていました。

そうして、野原にくと、タンポポや、コスモスや、とにかく野花を摘んで男の子に走りよって、手渡すのです。

あるときは、無理に手の中に茎から差し込んでみます。

振り向いてももらえないけれど、それでも女の子はあきらめません。

あるとき男の子が、手にした花を地面に投げ捨てて、

「うっせーなー、おまえ」「しつこいんだよ」

そう言って右手を上げかけました。

でも女の子がすくんで、目からポロポロ涙を流しているのを見て、

男の子も少し反省して、走り去っていきました。

「もうついてくんなよ」

それでも女の子はあきらめません。それから毎日毎日ついて歩きます。

あるときなど突き飛ばされました。

「大丈夫かい」 見かねたおじさんが助け起こしてくれました。

「おじさん、見てたよ。あの子ぶんなぐってやろうか？」

女の子は、急に泣き出しました。

「いいの、私が悪いの、ごめんなさい」「だから気にしないでね、おじさん」

このときは、男の子もすごく反省をしていました。なんとなくですが、

この子のことが気になってきていたのです。

この突き飛ばしたことは、大人になっても忘れられない出来事におとこの子の記憶に刻まれました。

ある日、おとこの子は、女の子の手を捕まえて、

「この前は悪かったな、突き飛ばして」「今日は一緒に帰ってやるよ」

そうして、手を握ってもらいながら帰ったのです。

でも、手を握ってもらうのが恥ずかしいのと慣れないので

フラフラしてしまいます。

「お前、給食をチャンとくってっか？ バーロー」「食べてるよ」

そのときです、女の子が道路の端から足を滑らして、車道に

転びました。

交通量の多い道路なので、車がきます。「きゃー」

そのとき男の子が、女の子を後ろからおなかのあたりに

手を回して、引っ張りあげました。

「ばかやろー」「しにてーのか」

「お前ふざけんなよ」

そのとき女の子は後ろから抱えられたのがとても
恥ずかしくて、思わず男の子のほっぺたを思い切り
ぶってしまいました。

「いってーナ、おまえなにすんだ。助けてやったのに」

このことを境に、大人になるまでお互いに会うことがない二人になりました。
女の子はやがて大人になり、そのことも忘れてしまいましたし、今では小町
と呼ばれるくらいの綺麗でやさしい女性になっていました。

会社でも人気がありますが、不思議と彼氏は出来ないでいました。

「あいつに声をかけるなよ、気が強くてな。後ろに近づくと、バチコーンされるぜ」
そう噂されていました。

ある時、徹夜明けの仕事の後の帰りのことでした。

フラフラして。都会の中、人の多さで、さらに気が遠くなりそうになります。

何がなんだかわからなくなったとき、横断歩道だけは目に入り、一歩したときです。

キキーッ、「キャアー」という奇声が起こりました。赤信号でわたりかけたところに
車がきたからです。そのとき・・・ 後ろから抱き寄せられました。

「バカやロー、死にたいのかー」「お前ふざけんなよお」

え？どこかで聞いたこれ。でも、胸を触られたと思い

振り返りざま手を振りかざしたとき。手を受け止められました。

「今度は殴られないぞ」そう言って、抱きしめられました。

「ずいぶん探した」

：

「な、また花を摘んでくれよ」

女の子の目から涙がポロポロ～

通行人は二人をよけてけげんそうに、青信号をわたっていきました。

「うん」

つづく・・・

君を忘れないから

「行ってまいります。」

明日の朝彼はそうって敬礼して出て行くのだ。

もう彼の姿は永遠に見ることはないのかもしれない。

そう思うと、涙が止まらない。彼の訓練でガサガサの手が

私の顔をそっと包んで、空にあこがれる少年のような目で見つめてくれた。

「そうじゃない」「泣かなくていい」

「君の顔を良く見せてくれ」「君を忘れないから」

「君の顔を頭に刻む」「天国で待ち合わせるために最後の記憶にするんだ」

「君のために行くから」「また会うまでは子を産んで立派に育ててくれ」

「俺より君のほうがお国のために立派に役立てるはずだ」

「俺の理由は君のためだけでいい」

「明日の朝まで俺を抱きしめてくれ」

その言葉が最後だった。朝そっと出て行った。私はその静かな物音にただせを向けて震えていた。涙と嗚咽を押し殺すのが精一杯だった。

彼は二度と帰ってこなかった。きっと大好きな空を今も飛んでいるのだろう。

今日の空は青いなあ。今日はおばあちゃんの命日だ。

私は日の丸の会社のCAをしている。命日にはいつもおばあちゃんの声が聞こえる。

「空はいつも平和なんだ」「皆待つ人がいるんだ。必ず降りてきなさい」

私はおじいちゃんを知らない。なんでも空に行ってそのまま帰ってこなかったらしい。

戦時中のことだ、たぶん特攻隊で命を落としたんだろう。私の母の命を残して。

私が空の仕事をしているのも不思議な縁だ。おばあちゃんは猛反対をしたが、

日の丸マークの会社と知って許してくれた。いまもそうなのかな。

おばあちゃんはあるといつも空にいるからと言っていた。きっとじいちゃんを探しているのかな。

とそのとき、青い空にゼロ戦が飛んでいるのを見た。

「え？、そんな」「これから飛ぶのに、私疲れているのかな」

今日は新しい機長の初フライトだから失敗できないのに。

空のゼロ戦が閃光とともに、消えた。ドン！そう聞こえた。

急にドキドキして、胸が高鳴って倒れそうだ。

「もう駄目」と思ったとき、両肩を支えられた。

「ヤアお待たせ」「これから飛ぶのに大丈夫？」

「誰？」

「君のシップの機長なんだけど」

ドキドキ。トキメいて顔が真っ赤なはずだ。恥ずかしい。
「また会えたね」「君を忘れないからって言ったろ」
「え？ 俺何を言ってんだ」

そのとき私の頭の中で。
「はい」「わすれてなんていませんよ」
そう聞こえた。

千春：君を忘れない

http://www.youtube.com/watch?v=QnC8zIiA_CQ&feature=related

この作品は、若いころであった親切で笑顔の素敵なJAL CAのお姉さんにささげます。

がんばれJAL

ナナさんの歌が歌えたら

その子は、ナナさんの歌が大好きでした。
そしていつもこの道を通る男の子も大好きで、毎日毎日
この菜の花の花畑にきて、ナナさんの歌を練習するのです。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=5mLh-du29Oc

男の子にはお父さんがいないので、学校が終わったらいつもお母さんのお手伝いをしてこの花畑の道を通るのです。
そんな男の子が大好きなのです。おかあさんは気づいていました。
女の子を見かけると、いつも、男の子が不憫に思っていたのです。
あるとき、お花畑に差し掛かったときに、一休みするといい、
「お前、あの子と遊んでおいで、お母さんはお花の中で休んでいるから」
「うん」男の子は大喜びで、女の子のところへ駆けていきました。
実は男の子もこの子が好きだったのです。

「おまえ、いつもここで歌ってるな」「おれ、しってっぞ」
「うん」
「私、ナナさんの歌が歌いたいの」
「歌って聞かせたい人がいるから」
「でも声が出なくて歌えないの」
男の子はにかっと笑って
「そっか」「きっと、大人になったっらうたえっぞ」
「いつか俺にも歌ってくれよ」「そしたらおれがピアノを弾いてもいいな」

「うん、約束だよ」「そしたらお嫁さんになってあげる」
女の子は幸せな気持ちでいっぱいになりました。
だって半分は願いがかなったのですから。

「あれ、母ちゃんがない」 姿が見えません。
「母ちゃん！」書け戻してみると、おかあさんが倒れていました。
その男の子のおかあさんは、そのまま永遠に眠ったのです。
とても安心した顔をしたまま。
ひとりぼっちになった男の子は、少しして遠い町の子供のいない
親戚の家にもらわれていきました。

女の子も独りになったのですが、あの日にした約束を信じて
毎日・毎日 何度も菜の花が咲く季節を過ぎても、この場所で
歌を練習しました。

女の子も大人になっていました。そしてあの日歌えなかった歌も
いつの間にか歌えるようになっていました。その愛に満ちた歌は
認められ、美しい歌姫として認められるようになっていました。
それでもこの場所には時間のあるときに来て歌い続けていたのです。

男の子は、もらわれた家で、ピアノを習わせてもらいました。
ある意味、おかあさんの命と引き換えに苦勞から開放されていました。
そうしてこの男の子も世界的なピアニストとして認められました。
男の子には頑張る理由がありましたから。

その日は、男の子にとっては、大事な日でした。おかあさんの命日でした。
大人になって旅が自由になってこの場所にかえってこれるようになったのです。

菜の花が鮮やかに黄色のじゅうたんを作るこの場所。

「あの日はここに、あの子がいた・・・」

そのとき、あの歌が聞こえてきました。それも美しい歌になって。

「やあ、また会えたな」

歌はとぎれましたが、その女の子でした。そして振り向くと男の子に抱きつきました。

「約束だもん」

「覚えていたんだ」・・・「俺ピアノ弾けるようになったんだぞ」

「あ、母さん」

幻と解っていますが、それでも手を振っているのを二人でしばらく見ていました。

1ヶ月が経ち今日はリサイタルの日です。

「今日は、最後に歌姫に歌ってもらいます」

そう、彼女との約束を果たす瞬間がきました。

聞く人が息をのむなか、歌が始まってすこしすると
会場がどよめきました。その歌はナナさんの歌と
少し違っていました。外国語なので、それが解るのに
時間がすこしかかったのです。

その歌は、あの日から今日までの 女の子の

切ない日々の歌、男の子のおかあさんへの感謝の歌。

そして、男の子への告白の歌に変わっていました。

いつの間にかピアノの横に立って歌っていました。

伴奏が終わると、抱き合う二人に拍手が鳴り止みませんでした。

アンコールのない、ただ一度きりの歌になりました。

でもそのことはナナさんにも伝わり、二人の結婚の日に祝福が送られました。

男の子は、今日も逃げて走っています。

お腹がすいて、パンを盗んだり、果物を盗ったりして逃げるのです。

毎日毎日が生きるのに必死です。

男の子のお父さんは本当のお父さんじゃありません。

一流のばくちうちですが、よくトラブルに巻き込まれて怪我をします。

彼は、この子だけは、全うな道を歩いてほしくて、決して賭け事を

教えません。ですが、貧乏なので、自然と生きるすべが身についています。

「おまえにゃ、悪い金だが学校を出してやるが、大人になったら良い金でまっとうに生きる」それが口癖です。

男の子には、毎日が女の子どころじゃないのですが、それでも、クラスに大好きな女の子がいました。

好きなのですが、素直になれなくてつい辛く当たってしまいます。

それでもその子は、辛抱強く親切にしてくれます。

男の子にとって、その子は毎日生きるための目標のような感じになっていたのです。

学校に行けばあの子に会える。・・・

女の子もなんとなく、男の子が気になるのです。皆親切なんですが、男の子のように本音ではないような気がしたからです。そう、なんとなく男の子の気持ちに気づいていました。

その日は、女の子の誕生日です。学校ではお友達がプレゼントをあげていました。

とても、喜ぶ笑顔がまぶしくて、男の子はさびしい気持ちになって、校庭の隅で、泣きました。女の子にプレゼントもやれない自分が悲しくて。

男の子には、顔もしらないお母さんの形見のペアネックレスしかありません。

でも、決心しました。片割れをあの子にあげなきゃと。

終業の鐘がなると、真っ先に男の子は教室を飛び出して、女の子の家の門のかげで待つことにしました。

女の子が帰ってきて、男の子をみつけてびっくりしました。

「これ、お前にやる」そうって、ネックレスの片方を女の子の手のひらにパンッと乗せてニカッと笑い、きびすを返して走り出しました。

そのとき、交差点を曲がった車の急ブレーキが響いて、男の子が飛ばされるのを、そのまま女の子は見ていました。声もでなくて、足がすくんでもらったネックレスを

握りしめているしかありませんでした。

女の子の首には、大人になってもそのときのネックレスがありました。男の子だけがない事実から逃げるように。

「ばかなやつ、どうしてこんなに傷つけるの。あなただけがいないのがどんなにつらいか解らないなんて馬鹿な男」そこからは逃げ切れていませんでした。

校庭の隅で時折泣いていました。

それでも、すこしずつ、すこしずつ楽しい思い出のほうが多くなっていきまし、大人になって、楽しい社会人生活をおくるようになっていました。

新聞の記事では、世紀の大泥棒現るの記事が世間を騒がしていました。

彼女は、宝飾デザイナーになって、ある日は残業で会社に残っていました。

疲れて、深夜、うつらうつらしていると階下でかすかに物音がしました。

誰？と思って、そおっと降りてみると、そこには泥棒がショーケースを開けているところに出くわしたのです。

「キャー」と叫ぶ直前に、泥棒の手で口をふさがれました。顔は見えませんが、そのとき胸にキラッと光るものを見ました。

間違いなく、それは、あのときのネックレスのペアのほう。そうその泥棒は、あの男の子だったのです。

「やめて、盗むのはやめて」「そんなものに価値はないでしょ」

「あなたが盗むものはもっともっと価値があるものじゃないの？」

そうって彼女は、その男のネックレスのペアをだしてそっとあわせました。

「おまえ……」

そのとき男の子の記憶が一気によみがえりました。女の子を好きなことも。

「私の心は、そんな宝石じゃ買えないわよ」「盗っていけばいいわ」

そうって彼に抱きつきました。

まもなく、世界に通用するペアのデザイナーが生まれる運命が動き出しました。

男はその子をととても好きでいた。
だが、手に触れたこともない。
その子はお嬢様だ。そう、男はその家の使用人だ。
お嬢様に使えている。
その子にとっても使用人であって男ではないようだ。

あるとき、お嬢様は夏のバカンスに出ることにした。
もちろん身の回りの世話をする男も一緒に。

男は毎日その子の眩しい笑顔を見るために献身的に
働いていた。帽子を風で飛ばせば海にでも飛び込んだ。

その日は、朝から雨だ。珍しく大粒の雨でぬるい雨。
つまり、天候がどんどん悪くなるという兆候だ。
海の上では、天候の悪化が生死をわけることがある。
男は気をつけていたが、シャワー代わりの雨にはしゃぐ
その子を見つめて、癒されてもいた。

だが嵐はやってきた。
大きなクルーザーでも自然の力の前には、
水の上の木の葉のように揺れた。

つづく

究極の愛2

嵐が波のうねりを大きくして、木の葉のようにこの船を揺らしていた。

陸地が見えたような気がしたとき、大きな波をかぶった。

彼女は焼けるような暑さを顔に感じて目を開けた。

「青い」・・・それは空だった。

青い空が目に入り同時に日の光を全身に浴びていたために体全部が焼けるような暑さだったことに気がついた。

急いで木陰を探さなきゃ。そう思ったときに不意に腕をつかまれた。

使用人だ。

どうやら、船から投げ出され、この陸地（島？）に流れ着いていたらしい。

彼は、危険がないか少し見回りに行っていたようだ。

木陰で休むうちに、ようやく事態が飲み込めてきた。難破したのだ。

船には装備があったが、ここでは何も無い。ここがどこかも解らない。

海はといえば、あの嵐が嘘のように穏やかだが、船1隻見つからない。

飛行機も来ない。

無人島に流されたら、命の保障はないが、そのようだった。

もう、使用人と（いや、もう使用人という区別は無意味だ）二人だけだ。

生きようと思えば、二人協力しなければならないのだろうと気づいた。

その日から生きるための戦いが始まった。

幸いなことに海には食べるものに事欠かない。ただ、捕るという努力と慣れが必要だったが、どうにかなれてきた。

問題は火と水だが、それもこの島の山のおかげでなんとかなっている。

助けも来ないとなんとなく自覚が出来てきた頃、お互いに無くてはならぬ存在であることに気がつき始めた。唯一無二の人なのだ。

日付の感覚も亡くなって久しいが、たぶん1年も経ったろう。

私は、山に果物を探しに行くことにした。彼も、この島には危険な動物もいなかろうということで、ゆるしてくれた。

だが島の山とはいえかなりの山だ。覚悟して登り始めた。果物はふもとにいくつか見つけておいた。私はどうしてもあの山の頂上から四方の海を眺めてみたいという欲望に駆られたからだ。

地元の小さな山でさえ登ったことのない身だ。山登りがどれほど大変か身をもって学んでいる。しかし、それが何の自慢にもならないのは笑える。

そうやって半日かけて頂上に立った。そうして四方の海を眺めてみた。

だが彼女の目に映ったのは海だけじゃない。陸地も見える。

そう、私たちの居るところからちょうど反対側も見える。

だが待て・・・どうもそれには見覚えがある。あの綺麗なかたちの岬は・・・

地元だったのだ。そしてこの山はあの小さな山？

なんということか、反対側に難破していたなんて。どうりで危険も無いはずだ。

信心深い地元の者は、神の宿るこの山には近づかないから今まで、私たちも

気がつかなかったのだ。でもどうして彼はこれを知らなかったのだろう。

いや知っていたのかも。知らないふりをすればそれで良いだけだった。

そのとき彼の愛を知った。昔から愛されていたと感じてた。

そうして私は、山を降りた。果物もしっかり手に入れた。

彼は景色は良かったか？と聞いてきた。

「ええ、海しか見えなかったわ」「助けももう要らないし・・・」

「死ぬまで二人ね」

そう答えた。

大きな木の下で

中篇 「大きな木の下で <http://p.booklog.jp/book/4716>」 もクライマックスを迎えています。
無料公開ですので読んでみてください。

よかったら

コメントをください。

あなたのオムニバスな愛を教えてくれたらなおいいかも。

いい挿絵がほしい

林静一さんとか、わたせせいぞうさんの絵が好きですが、
文章のようにはかけませんよね。

挿絵がほしい。笑